天空への道しるべ

真条

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天空への道しるべ

【Ｎコード】
Ｎ８３２０Ｚ

【作者名】
真条

【あらすじ】
成長したある青年は、今はもう居ない老夫婦から受け継いだものを生かして、毎日を過ごしていく。
これは息抜きで書いてます。トリップではありません。設定がごちゃっとしてますが、どうか勘弁してください。
感想やアドバイス、その他なにか思ったことがあれば言ってください。

ある小屋で（前書き）

ファンタジー書いてみたかったです。
色々もやっとした空想を書いてみました。

ある小屋で

「おーい、今帰ったぞー」
「お帰りなさい」
「おかえりじいちゃん！」
森の中に、ぽつんと一軒の家があり、そこで老いた夫婦と小さな男の子が住んでいました。
「今日は魔獣の鍋を食いたい」
「はいな、爺さん」
「じいちゃん、今日は何捕まえたの？」
「おう、今日は熊公を狩ってきた。後で一緒に毛皮を剥ぎに行くぞ」
「やったー！」
爺さんは、一人で熊を倒すほど強い人でした。
「毛皮も最近貯まってきたし、明日町に売りに行くかねぇ」
「そうかい婆さん、じゃあノイドが手伝うと明日に間に合わねぇな」
「えー、毛皮取りたいー」
「駄目だ、明日売り出しに行くのに間に合わん」
「やるーっ！」
「おいノイド！」
婆さんは、町で商人相手に交渉が出来るほど頭のいい人でした。
「爺さん、早く追いかけないと」
「ノイド！お前熊公がどこに置いてあるのか分かってんのか！？」
「匂いで分かる！！」
「まったく、匂い消しの草を使っててもお構い無しか・・・」
小さな男の子は、いつも元気でした。
「待てノイドーッ！」
「待つもんかーっ！」
「うふふ、元気だねぇ」
森にぽつんと立っているその家は、いつも賑やかでした。

ある小屋で（後書き）

不定期更新です。

決別（前書き）

まだまだ始まったばかり。

決別

「ばあさん、今まで世話になった」
俺は、じいさんの墓の隣にある真新しいばあさんの墓に、そっと手を合わせた。
一年前にじいさんが急病で倒れて死んでしまってからは、ずっと衰弱していたので、いつかこうなるとは思っていた。
俺は、改めて二人に感謝しようと思う。
「じいさんから始めて戦い方の稽古をつけてもらった時は、痛くて泣きそうだったよ。
それからしばらくしてトンファーなんていう奇妙な武器を買ってくれたこと、今では感謝しまくってる」
じいさんに、今までの感謝を言う。
「ばあさんが町での毛皮や爪の卸し方を教えてくれたから、じいさんが死んでばあさんが動けなくなっても生きていけた。料理も教えてくれたから満足に生きていけた」
ばあさんに、今までの感謝を言う。
そして。
「俺、森を出ようと思うんだ。
森をでて旅して、知らない世界を見てみたい。
だから、ここでお別れなんだ」
俺は一呼吸置いて、宣言した。
「行ってきます、じいさん、ばあさん」
そして俺は、二人の墓に背を向けた。

決別（後書き）

気楽に行きます。
が、ここはおかしいだろ！ってとこがあったらじゃんじゃん言ってください。

思い出（前書き）

まだまだ、これからです。

思い出

《ノイドが強くなりたいと思った理由》

「ねえじいちゃん」
「ん？なんだ」
「おれ、一人で町に行ってみたいんだけど」
ノイドはじいさんに、一人で町に行きたいということを話した。
「・・・なあ、ノイド。お前、森の中に住んでる危ない動物を殺せるか？」
「？」
「魔獣や熊公のことだ。今のお前じゃ小屋の囲いから二十歩動いたらすぐに殺されちまうぞ」
「うーん・・・じゃあ特訓してよ！」
「はあ？」
「そのまじゅうとか、くまこうとかを倒せるように特訓してくれ！」
「・・・あほか。お前まだ6、7歳だろうが。話にならん」
「いいからやって！」

「グスッ、痛いよぉ・・・」
「これがお遊びだ。殺し合いだったら、今頃ノイドは死んじまってるぞ」
木の枝VS木の枝だったが、当然じいさんがあしらって終わった。
「・・・じいちゃん」
「なんだ」
「・・・これを、これから毎日やってほしい」
「・・・ほお」
「んで、強くなるまで一人で町には行かない！」

「・・・よし、分かった。じゃあ俺もお前に本格的に戦いを教えてやろう」
「お願い、じいちゃん！」

《ノイドが武器を買ってもらった時のお話》

じいさんとばあさんが町に行く時、八歳になったノイドはいつもの様に連れて行ってもらった。
「・・・ひまだー」
「ぶつぶつ言うな。ばあさんが毛皮とか牙を売りに行ってる間の辛抱だ」
「・・・そうだじいちゃん、おれ武器見に行きたい」
「・・・しょうがねぇなぁ。売り物を卸し終わったら見に行ってやるよ」
「やったー！」

「・・・剣ばっかだねー」
「そりゃ一番基本的な武器だからな。数も多いのは当たり前だ」
ノイドは、じいさんとばあさんに連れられて武器屋に来ていた。
「・・・じいちゃん、このカッコいいやつなんて言うの？」
「おい、あんまり高いものは買え・・・なんだ、トンファーか」
「これ買って！」
「こんな軽くて軟い張りぼてみたいなのは買っちゃいかん、違う店に行くぞ」
「分かった！」
じいさんは、ノイドが欲しいと言えば大体の物は一応買ってくれた。
「じいちゃん、これ木製だよ！？」

「当たり前だ、さっきの物より丈夫で重い。練習にはうってつけだろ？」
「いやだ！早くおれまじゅう倒したい！」
「アホ！俺相手にろくに戦えないのに何を言ってんだ！」
「・・・分かった」
「分かればいいんだ」
「・・・じいさんも大変だねぇ」
ばあさんが本音を漏らした。

《ノイドの初めての料理》

「ばあさん、これ目に染みる・・・」
「我慢しなさいな、玉ねぎはそういうもんさ」
ノイドが今刻んでいるのは、玉ねぎという皮しか無い奇妙な食べ物だ。
「ノイド、それが刻み終わったら挽肉に混ぜて、よくこねておきなさい」
「わかっ・・・っくしゅん」
「うふふ、かわいいくしゃみだねぇ」
「うるさい」
ノイドは赤くなりながらも、玉ねぎを刻み終えたので、それを挽肉によく混ぜた。

「よし、次はそれから空気を出さなきゃねぇ」
「え、この中に空気なんてあるの？」
「少しだけあるんだよ。だからこうやって」
ばあさんは、丸くまとめた挽肉を右手と左手でキャッチボールするように投げて見せた。

「やってごらん」
「わかった」
ノイドは右手の挽肉を左手に向かって投げたが、キャッチすることは無くそのまま床に『ベチャッ』と着地した。
「・・・ごめんばあさん」
「うふふ、まだまだあるから練習しなさい」

「できた！」
「ノイド、これはハンバーグって言うんだよ」
「へえ」
机の上には、パンと山菜サラダと、ノイドが作ったハンバーグが置いてあった。

「うまい！」
「ほんと！？」
「おう、うまい！ノイド、これからもこういうのを作ってくれよ」
「分かった！」

思い出（後書き）

感想とかあったら言ってください。

唯一の村（前書き）

毛皮を売ったり、トンファー買ったりした村です。
ここは国には所属していないので、いわゆる田舎の様な感じになってます。
ついでに言うと、地味にばあさんはノイドに役立つものを色々渡してます。
一方じいさんは戦闘関連だけ・・・（笑）
というか説明文難しい。

唯一の村

「・・・ここに来るのも今日が最後か・・・」
ノイドが訪れたのは、いつも毛皮を売りに来る村だった。
ここ一帯は、全世界でも珍しい国に所属していない地域で、いろいろな特産品がある。
なので、この村でも時たま王国からの旅商人を見かけることができる。
「さて、別れの挨拶と行きますか」
ノイドは早速贔屓にしている万屋に向かった。

「おじさーん、来たよー」
「おー、ちょっと待ってろー」
ノイドは小さな店に入ると、二階に向かって店主を呼んだ。
「ノイドか、久しぶりだな!」
「おじさんこそ元気でしたか?」
二人で笑いあう。このやり取りも最後かと思うと、少し寂しい。
「そういやノイド、あのばっちゃんはどうした?」
「・・・少し前に、死にました」
「・・・そうか・・・ついにばっちゃんの方も死んじまったか・・・」
おじさんは目を閉じて少しだけ黙った。
「それで、今日は何の用だ?毛皮はこの前持ってきたろ?」
「いえ、旅の準備をここで済ませようと思いまして」
「おいおい、まさかカルーダ王国に行くのか?あそこは通行許可証が無いと入国できないって聞いたことがあるぞ」
「大丈夫です、許可証はばあさんがくれたので」
「・・・あのばっちゃん、底知れないな・・・」
「まあ、それは置いといて。旅の準備をしたいんですけど・・・」

「ああ、そうだったな。一通り持ってくるから二階で待っててくれ」
「分かりました」
ノイドはおじさんに礼を言い、二階に向かった。

「あ、ノイド」
「リリス、久しぶり」
ノイドが階段を上がると、聞き耳を立てているリリスを見つけた。
「ノイド、旅に行くって本当？」
「本当だよ、これは前から決めていたことだから」
「・・・ここで待ってて」
リリスはそう言うと、自室に飛び込んで行った。
「・・・どうしたんだろう」

「ノイド、これ」
「・・・？」
リリスが持って来たのは、一つの蒼い石が嵌めこまれたペンダントだった。
「これ、お守りに持ってて・・・？」
リリスがこわごわとお願いをする。
「なんでそんなおっかなびっくり聞くんだよ・・・ありがとな、大事にするよ」
そう言うと、リリスの表情がパアァッと和らいだ。

「じゃ、これが一通りの荷物だ。そのリュックに入るよな？」
「はい、多分ギリギリで」
ノイドがおじさんから旅の用意をもらうと、おじさんはレジを操作し始めた。
「・・・にしても、王国もよくこんなレジなんて物作ったなあ」
「確か、伝力で動いてるんでしたっけ」
カルーダ王国が数十年前に開発に成功した『伝力』を使った数々の

機械は、今では世界中で使われている。
この伝力と言うのは、伝結晶という特殊な結晶を加工して出来た伝力機から発生するエネルギーであり、現在の暮らしには欠かせないエネルギーとなっている。
これは色々な物に応用することができ、魔法もこの伝力で発現される。
例えば火の魔法。これは火の伝力を帯びた伝結晶を、結晶回路というものに嵌めることで発動することができる。
この結晶回路というのは、一般人には渡ることはまず無いと言っていいだろう。あるとしたら、警察かイレイサーあたりだろうか。あとはほとんどが軍事利用されている。
が、それ以上はノイドも知らない。ノイドはしがない一般人なのだから知っている訳もない。
「えーと、全部で５１２エルだな。あるか？」
「多分あります。えっと・・・」
ノイドはリュックの中に手を突っ込み、銀貨を5枚と銅貨を2枚取り出した。
「はいよ・・・釣は８エルでいいな」
そう言っておじさんは黒貨を8枚レジから取り出し、ノイドに投げた。
「わわっと、投げないでくださいよ」
「そう言うなよ、にしてもやっぱり便利だな、これ」
「昔から使ってるのに何感慨深く呟いてんですか」
「いやいや、ホント便利だぜ、これ」
根本で話が食い違っていたが、買い物は終わった。

「じゃ、元気でな」
「おじさんもお元気で」
「ノイド、気をつけてねっ！」
ノイドは二人に手を振りながら村を出た。

その首には、とりあえず着けておいたペンダントが下がっていた。

唯一の村（後書き）

リリスは残念ながら出番は少ないです。
けど後々物凄い山場でドカンと出せる・・・といいなあ。
魔法や伝力とかいうのは後々しっかり説明できる時が来るので、そこまでじっくり読まなくてもいいかと。
イレイサーも後々説明するので、我慢してください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8320z/

天空への道しるべ

2012年1月1日00時54分発行